

AI活用セルフチェックリスト

大企業 新規事業部向け

事業開発の各フェーズでAIを安全かつ効果的に活用するために | 2026年版 | 全5領域

本チェックリストは、大企業の新規事業部門がAIツールを活用して事業開発プロセスを効率化するためのガイドです。各領域で「やるべきこと」だけでなく「やってはいけないこと」を明示し、コンプライアンス上の留意点と工数削減の目安を整理しています。社内のAI利用ポリシーと照合しながら、該当する項目にチェックを入れてご活用ください。

5つの活用領域

01	エキスパートインタビューの効率化 仮説設計・質問リスト・音声文字起こし・横断分析
02	現地観察・フィールドリサーチ 観察設計・画像分析・定性データ構造化・ジャーニーマップ
03	プロダクトモックアップ制作 ワイヤーフレーム・UIモック・プロトタイプ・ユーザーテスト
04	市場分析・競合調査 TAM/SAM/SOM推計・競合マップ・技術トレンド・感情分析
05	事業計画書ドラフト ストーリーライン・財務モデル・リスク分析・KPI設計

使い方

□ = やるべきこと (Do)	該当項目にチェックを入れてください
× = やってはいけないこと (Not-To-Do)	AI活用で陥りやすい落とし穴です
□ = コンプライアンス注意点	社内規定・法令との照合が必要な項目です

— このページは余白です —

01 エキスパートインタビューの効率化

仮説設計・質問リスト・音声文字起こし・横断分析

□ やるべきこと (Do)

- インタビュー対象領域の事前リサーチをAIで実施し、業界構造・主要プレーヤー・技術動向の仮説マップを作成する
- 仮説に基づく質問リストをAIで生成し、MECE観点で抜け漏れを確認する（質問数15〜20問を目安に構造化）
- インタビュー音声をAI文字起こしツールで書き起こし、発言の要約・キーワード抽出を自動化する
- 複数インタビューの横断分析をAIで実施し、共通パターン・矛盾点・未検証仮説を抽出する
- AI要約の精度を原文と突合し、ニュアンスの欠落や誤解釈がないかを人間が最終確認する

× やってはいけないこと (Not-To-Do)

- × AIが生成した質問リストをそのまま使う — 対象者の背景・専門性に応じたカスタマイズなしでは浅い回答しか得られない
- × AI文字起こし結果をレビューなしでインサイトレポートに引用する — 固有名詞・専門用語の誤認識が頻発する
- × 「AIが分析した」という理由でインタビューの発言意図を曲解する — 文脈の読み取りは人間の責務

□ コンプライアンス注意点

- ・ 録音・文字起こしは事前に対象者の書面同意を取得すること（個人情報保護法・社内規定）
- ・ インタビュー内容を外部AIサービスに入力する場合、機密情報の取り扱い基準を確認すること

工数比較

AIなし

2〜3週間 →

AI活用

3〜5日

02 現地観察・フィールドリサーチ

観察設計・画像分析・定性データ構造化・ジャーニーマップ

□ やるべきこと (Do)

- 観察フレームワーク（5W1H+感情・行動・環境）をAIで設計し、記録テンプレートを事前準備する
- 現場で撮影した写真・動画をAI画像認識で分析し、行動パターンやペインポイントの候補を抽出する
- フィールドノートをAIで構造化し、定性データのオープンコーディング・カテゴリ分類を支援させる
- 観察結果からカスタマージャーニーマップの初稿をAIで生成し、ペインポイントと機会領域を整理する

× やってはいけないこと (Not-To-Do)

- × AI分析結果を「現場の声」として報告する — AIが見たのは画像データであり、文脈や感情は読み取れない
- × フィールドワーク自体をAIで代替しようとする — 現場に行かなければ見えない暗黙知がある

□ コンプライアンス注意点

- ・ 現場撮影は施設管理者・被観察者の許可を事前に取得すること
- ・ 写真・動画に個人が特定できる情報が含まれる場合、AI分析前に匿名化処理を施すこと

工数比較

AIなし

3〜4週間 →

AI活用

1〜2週間

03 プロダクトモックアップ制作

ワイヤーフレーム・UIモック・プロトタイプ・ユーザーテスト

□ やるべきこと (Do)

- ユーザーストーリーとペルソナ情報をAIに入力し、主要画面のワイヤーフレーム案を複数パターン生成する
- AIでユーザーフロー図 (画面遷移図) を自動生成し、主要タスクフローに抜けがないか確認する
- AI画像生成ツールでUIデザインのビジュアルモックを作成し、ルック&フィールを早期検証する
- プロトタイプのインタラクション設計をAIで支援し、主要シナリオのクリックابلモックを短期間で構築する
- アクセシビリティ基準 (WCAG 2.1 AA) への準拠をAIチェッカーで事前スクリーニングする

× やってはいけないこと (Not-To-Do)

- × AI生成のUIモックをそのまま開発仕様書にする — デザインシステムとの整合性、実装可能性の検証が必要
- × 「AIが作ったから速い」を理由にユーザーテストを省略する — 速度と品質は別の問題
- × AI生成デザインの知的財産権リスクを無視する — 既存UIとの類似性チェックを必ず実施

□ コンプライアンス注意点

- ・ プロトタイプに使用するダミーデータに実在の個人情報・企業情報を含めないこと
- ・ 外部AIサービスにアップロードするデザイン資料が社外秘に該当しないか確認すること

工数比較 AIなし 4〜6週間 → AI活用 1〜2週間

04 市場分析・競合調査

TAM/SAM/SOM推計・競合マップ・技術トレンド・感情分析

□ やるべきこと (Do)

- 対象市場の公開データ (政府統計・業界レポート・IR資料) をAIで収集・整理し、推計基礎データを構築する
- AIを活用してTAM・SAM・SOMを複数シナリオで推定する
- 競合企業のプロダクト・価格・チャネル・ポジショニングをAIで整理し、競合マップを自動生成する
- 特許データベース・論文検索をAIで横断分析し、技術トレンドと参入障壁の構造を把握する
- AI推計値には全て算出根拠・前提条件・信頼区間を明記し、意思決定者が判断できる形で提示する

× やってはいけないこと (Not-To-Do)

- × AI推計値を「ファクト」として社外プレゼンに使う — 推計手法・前提条件の明示なしでは意思決定を誤らせる
- × 有料レポートの全文をAIに入力して要約させる — 著作権・ライセンス条件を確認すること
- × AIが出した市場規模をそのまま事業計画に組み込む — 人間による算出口ジックの妥当性検証が必須

□ コンプライアンス注意点

- ・ 競合情報の収集は公開情報に限定し、不正競争防止法に抵触する手段を用いないこと

工数比較 AIなし 3〜5週間 → AI活用 1〜2週間

05 事業計画書ドラフト

ストーリーライン・財務モデル・リスク分析・KPI設計

- やるべきこと (Do)
- 事業コンセプトとバリュープロポジションをAIに入力し、ストーリーライン (Why/What/How/When) の骨格を生成する
- 類似事業・先行事例のビジネスモデルをAIで分析し、収益構造・コスト構造のベンチマークを整理する
- AIで財務モデルの叩き台 (売上予測・コスト構造・損益分岐点・CF) を作成し、感度分析を実施する
- リスク分析 (市場・技術・組織・規制) をAIで網羅的に洗い出し、対応策の優先順位を整理する
- 事業計画書全体の整合性をAIでクロスチェックし、数値の矛盾・論理の飛躍を検出する
- × やってはいけないこと (Not-To-Do)
- × AI生成のピッチ資料をレビューなしで経営会議に持ち込む — 数値の整合性・前提条件の妥当性は人間が検証する
- × 財務モデルのAI推計値を確定値として扱う — 参考値であることを明記し、経理部門のレビューを経ること
- × AIに「楽観シナリオ」だけ作らせる — 必ず悲観シナリオ・ベースシナリオも生成させ比較する

□ コンプライアンス注意点

- ・ 社外向け資料にAI生成コンテンツを使用する場合、社内のAI利用開示ポリシーに準拠すること

工数比較 AIなし 4〜8週間 → AI活用 2〜3週間

導入ステップガイド

Step 1	AI利用ポリシーの整備 情報セキュリティ部門と連携し、利用可能なAIツール・入力可能なデータ範囲・承認フローを明文化。
Step 2	パイロット領域の選定 本チェックリストの5領域から1〜2つを選び、小規模チームで2〜4週間のトライアルを実施。
Step 3	効果測定と改善 工数削減率・アウトプット品質・コンプライアンス遵守率を定量的に測定し、運用ルールを改善。
Step 4	段階的展開 パイロットの知見を標準化し、他チーム・他領域へ展開。成功パターンをナレッジベース化。

AIツール選定の判断基準

■ データセキュリティ	入力データの保存・学習利用ポリシーを確認。オプトアウト可能なサービスを優先選定。
■ オンプレミス/VPC対応	機密データを扱う場合、クラウドAPI型ではなくVPC内デプロイ可能なモデルを検討。
■ 出力の監査可能性	AI生成物の根拠追跡（出典表示・推論過程の説明）が可能なツールを選定。
■ 既存システムとの統合	社内のナレッジ管理・プロジェクト管理ツールとのAPI連携が可能かを確認。
■ コスト構造の透明性	従量課金・定額制など、利用規模拡大時のコスト見通しを明確化。

AI活用における重要な前提

- AIは「思考の補助輪」であり、最終判断は必ず人間が行う。AI出力を無批判に採用しない。
- 生成AIの出力には事実誤認（ハルシネーション）が含まれる可能性がある。重要な数値・事実は原典で検証する。
- AIツールの利用状況を定期的に棚卸しし、不要なアカウント・データを適切に廃棄する。

AI活用の戦略設計を支援します

Cobe Associeは、大企業の新規事業部門に特化した戦略コンサルティングファームです。AI活用戦略の策定から、社内ポリシー設計、パイロットプログラムの設計・伴走まで、新規事業開発におけるAI活用を包括的に支援します。

お問い合わせ: cobe.co.jp